

## 国際シンポジウム 2012 “Remapping *habitus* in Translation Studies”

鳥飼玖美子

(立教大学特任教授)

「ハビトウス(*habitus*)」概念を用いた翻訳通訳研究をテーマにした国際シンポジウム “Remapping *habitus* in Translation Studies”が、2012年4月26日から28日までグラーツ大学(University of Graz, Austria)で開催された。オーストリア第二の都市であり世界遺産に認定されているグラーツは、山々に囲まれ中心をムーア川が流れる緑豊かな落ち着いた街である。シンポジウム開催の頃は初夏の陽気となり色とりどりのチューリップが咲き乱れていた。1585年創立のグラーツ大学(ドイツ名はKarl-Franzens-Universität Graz)はオーストリアで二番目に古い総合大学であり、人文学部(Faculty of Humanities)の中に設けられた翻訳学科(Department of Translation Studies)がシンポジウムの主催者である。

シンポジウムのテーマである「ハビトウス(*habitus*)」はフランスを代表する社会学者ピエール・ブルデュー(Pierre Bourdieu, 1930-2011)による独自の概念である。ブルデューは、社会学のみならず哲学、文学理論、人類学など多岐にわたる研究を行い、文化や言語を資本とみなして考察した著作も多い。その思想は独特の用語と共に多くの学術分野に影響を与えている。

ブルデューの主要概念のうち翻訳通訳分野との関連で特に重要なのは、「ハビトウス(*habitus*)」、「場/界(*field*)」、「実践/慣習行動(*practice*)」であろう。これらの概念はそれぞれが密接に関連し、社会の中で構造化された空間における人間の行動を解明する。特に「ハビトウス」はブルデュー特有の用語であり、ブルデュー社会学の最も重要な概念である。*habitus* はもともと「持つ」を意味するラテン語 *habere* の派生語であり、本来は「態度、性格、性向」などを意味するが、ブルデューはこれを「社会的に獲得された性向の総体」の意味で使用し、人間が社会化されるメカニズムを説明するのに用いた。家庭教育において発生する性向は、第一次ハビトウスと呼ばれ、知覚や行為を決定づけ、後に形成するハビトウスを新たに生み、それに応じた慣習行動を決定づける。その意味でハビトウスは「性向の体系」であり、「身体化された歴史」であり、「ある状況においてなすべきことについての実践感覚」である。実践感覚は体系化してハビトウスを形づくり、またハビトウスによって生成される。

なお、ブルデューの著作および用語についてはフランス語から英語に訳される際に必ずしも適訳が与えられなかったというのが、シンポジウム基調講演者であり、フランス語を母語とし英語も話す Jean-Marc Gouanic の意見であった。例えばブルデューはフランス語で ‘*pratique*’ と ‘*practice*’ を区別して使っていたようであるが、英訳では *practice* となっており、日本語訳でも「慣習行動」と「実践」が混在している。

---

TORIKAI Kumiko, “International Symposium 2012 ‘Remapping *habitus* in Translation Studies,’” *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 305-308. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

翻訳分野におけるハビトゥス研究としては、1998年にDaniel Simeoniが、“The pivotal status of the translator’s *habitus*” (*Target*, 10:1) において、DTS(記述的翻訳研究)を補完するものとして、「規範(norm)」では説明のつかない翻訳者の行動を理解する為にハビトゥス研究を提案している。2003年にはMoira Inghilleri が、“*Habitus, field and discourse: Interpreting as a socially situated activity*” (*Target*,15:2)を发表し、通訳者の「規範」を社会学的視座から検討した。2005年には*The Translator* 誌が “Bourdieu and the sociology of translation and interpreting” 特集号を組むに至っている。翻訳の社会学をテーマにした国際会議は2005年にグラーツ大学で開催されているが、今回のシンポジウムは、その後の研究動向を検証し、翻訳研究におけるハビトゥスを再検討し今後の進路を改めて探ろうという趣旨で開催されたものである。

グラーツでのシンポジウムは、いくつかの点で今後の翻訳通訳研究の方向性を示すものと考えられる。

まず 1 点目の特徴は、シンポジウムの形態である。テーマを絞り参加者数を限定するという形式は、2009年3月テルアビブ大学で開催されたワークショップも同様であったが(詳細については『通訳翻訳研究』第9号を参照されたい)、今回はそれをさらに進め、招待された発表者10名は事前にフルペーパーを提出し、それを読んだ指定討論者が「全体をまとめてコメント、さらに3点ほど質問」をした上で、全参加者が自由に討論という方法を取った。各国からの招聘発表者は全員が市内の修道院(Exerzittenhaus der Barmherzigen Schwestern)に宿泊し3日間を共に過ごしたこともあり、非常に率直かつ密な討論が可能になった。大規模な大会にはない充実した機会が得られたというのが一致した感想であった。

2 点目の特徴は、若手研究者を育成しようという意気込みがシンポジウムに表れていたことである。初日はJean-Marc Gouanvic (Concordia University)による基調講演、第一セッションが理論研究、第二セッションが実証研究についての発表だったが、会議形式に並べられた長方形の机を囲んでの活発な議論を熱心に聞いていたのは、後ろのテーブルに思い思いに座ったグラーツ大学博士課程の院生十数名であった。さらに2日目の後半は、ハビトゥス概念を使った博士論文が紹介され、既に博士学位を取得した2名(フィンランド、ギリシャ)の他に英国マンチェスター大学から2名の後期課程院生が執筆中の博士論文について発表し、参加者から忌憚のない意見が出された。

3 点目は、近年盛んになってきた社会学的アプローチが一層の進化を続けていることであり、特に2000年頃からのブルデュー研究が一定の成熟期に入り今後の方向を探ろうという決意が、“Remapping”というテーマに如実に示されている。シンポジウムを企画したMichaela Wolfの言葉を借りれば、「翻訳研究におけるハビトゥス概念の役割と応用を再評価し、さらなる学際的視点を取り込んで概念フレームワークを再形成する」のがシンポジウムの目的であった。

その「学際的視点」が4点目のシンポジウムの特徴であり、それぞれの発表に端的に表れていた。例えばマイクロ社会学におけるアイデンティティ研究をもとに翻訳者のハビトゥスを論じた Rakefet Sela-Sheffy (Tel Aviv University)、Latourによる Actor Network Theory を組み込んだ翻訳者についての研究 (Kristina Abdallah, University of Vassa)、Boundary Theory (Gieryn, 199) を扱った手話通訳研究(Nadja Grbc, Graz University)、Lahire (2004)における動的なハビトゥス概念を用いた翻訳者の役割研究(Reine Maylaerts, Katholieke Universteit Leuven)などがあった。

鳥飼は通訳者のハビトゥスを探る手法としてオーラルヒストリーを提案した。通訳研究の場合、書記言語を対象とする翻訳と異なり、訳出物がデータとして残らない、或いはあっても使うことを許可されないなどの制約があることから、通訳者自身の語りからハビトゥスを探る上で極めて有効であるという主張には賛同を得られた。従来型の研究手法に慣れた研究者によく見られる、歴史学や社会学と比較して資料の信憑性が弱いなどのオーラルヒストリーに対する批判について、ナラティブ・データの脆弱性を「代表性 (representativeness)」「真実性 (truthfulness)」「信頼性 (reliability)」「妥当性 (validity)」の4点から論じたところ、指定討論者の Gouanvic から、「ハビトゥス研究においては、代表性や真実性、信頼性は問題にしなくて良いのではないか」(つまり問題にすべきは、研究方法が研究の目的に照らして妥当かどうかという validity だけ)という貴重な指摘もあった。また、ハビトゥスは動的で刻々変わるものであるから、primary habitus から生まれた specific habitus も次々と新たなハビトゥスを生むと考えれば、通訳者から政治家に変身した事例などは、「通訳ハビトゥス」から「政治ハビトゥス」が生じたと考えることが可能ではないかという示唆も受け、これまでの研究を別の視角から見直す契機となった。

最後に、ブルデューのハビトゥスやフィールドという概念が、通訳翻訳研究の様々なジャンルで参照されていることが印象的であった。文学翻訳における規範との関係を考察しシンポジウム全体の枠組みを提供したともいえるエジプト出身の Sameh Hanna (University of Salford)、漫画における翻訳をフィールドとハビトゥスの関連で論じた Klaus Kaindl (University of Vienna)、ハムレットのギリシャ語訳を取り上げ、文体選択と翻訳ハビトゥスの関係を探った Vasso Yannakopoulou (National and Kapodistrian University of Athens)、アンケート調査により文学翻訳者のハビトゥスを追究した Gisella Vorderobermeier (University of Graz, 急病により代読)、さらに博士論文執筆中の院生は一人が、南米におけるジャーナリズム翻訳者のハビトゥスをテーマにルモンド紙のスペイン語訳をデータとして使い、もう一人は文学翻訳における翻訳ハビトゥスの多元性に取り組むものであった。12 の発表のうち、大半が翻訳研究であり、通訳研究は鳥飼を含めても2本のみであったが、これは通訳研究の場合はデータ収集が翻訳研究に比べて困難なことに起因することが明らかであり、今後はインタビュー手法などの研究を進めることが必要だという意見も出された。訳出データの入手が困難な場合だけでなく、役割や規範に関する通訳者自身の意識を究明する上でライフストーリーを含む各種のインタビューを活用することは重要であり、通訳研究にも社会学的アプローチが増えるであろうことが予想される。

ハビトゥスは抽象的で難解な概念であるが、「場／界」や「実践／慣習行動」などと組み合わせることにより、通訳者翻訳者について、またその行為についてより深く理解する手がかりになることを期待して、本報告を終える。

#### 【参考文献】

Pierre Bourdieu の著作は多いが、ハビトゥスについては特に、以下が必読である。

Bourdieu, P. (1980). *The Logic of Practice*. Stanford University Press. (日本語訳は『実践感覚 1.2』(みすず書房))

翻訳研究におけるハビトゥスについては以下の文献が参考になる。

Gouanvic, J-M. (2005). A Bourdieusian theory of translation, or the coincidence of practical instances: *Field, 'habitus', capital and 'illusio'*. *The translator*. 11(2): 147-166.

Inghilleri, M. (Ed.). (2005). Bourdieu and the sociology of translation and interpreting. *The translator*.

11(2): 243-268.

Simeoni, D. (1998). The pivotal status of the translator's '*habitus*'. *Target*. 10(1): 1-39.

Wolf, M. & Fukari, A. (Eds.), (2007). *Construction a sociology of translation*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

翻訳通訳研究における社会学的アプローチを日本語で読むには以下がある。

マンデイ、J. (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳). みすず書房. [原著: Munday, J. ( 2008 ).  
*Introducing translation studies.: Theories and applications*. (2<sup>nd</sup> ed.) London: Routledge].

通訳研究におけるオーラル・ヒストリ手法(ライフストーリー・インタビュー)については、以下を参照。

鳥飼玖美子(2007) 『通訳者と戦後日米外交』(みすず書房).